

●前回のテーマ

なぜイギリスが「最初の工業国家」になったのか？

- 1) 「産業革命」論の系譜
- 2) 産業革命「以前」と「以後」～大塚『欧州経済史』を中心に
- 3) 分析視角：「産業」と「地域」

毛織物・綿工業/石炭・製鉄業/鉄道業・造船業の地域・産業連関の発展プロセスの検討

●本日の演習問題とテーマ

テーマ「資本主義の起点は都市か農村か？」

演習問題「マニュファクチュアの歴史的意義について、問屋制度との対比において論ぜよ」

- 1 大塚久雄のマニュファクチュア論
- 2 堀江英一のマニュファクチュア論
- 3 サフォークにおける農村織物都市の成立と展開

1 大塚久雄のマニュファクチュア論

●『フランダースの犬』

8世紀～12世紀：フランダース毛織物工業の繁栄（原毛はイングランド東南部）

イタリアや南ネーデルランド（とくにフランドル）の諸都市：市政を牛耳る商人ギルドの成員が、財力と販力によって原料供給と製品販路を独占し、毛織物製造の全工程にわたって問屋制支配を展開

(1)マニュファクチュアと問屋制の絡み合いの二つの型

第一形態：「農村の織元」（中産の生産者層またはヨーマン層の産業経営）を中心とした問屋制度

・問屋としての商業資本が、農村マニュファクチュアの利害に服している。

第二形態：「都市の織元」（問屋制商業資本）を中心とした商業資本による産業資本の支配（絶対主義の支柱をなした特権的商業資本の同じ性格）

イギリス革命（ビュリタン革命：1640-60年）：第一形態の「下からの」逞しい台頭→第二形態が第一形態によって打倒される（商業資本に対する産業資本の勝利）

●用語

・問屋制度(Putting-out system)「商人（問屋制前貸人）が、分散しそれぞれ仕事場と道具

を有する独立の小生産者にたいして、個別に原料や半製品、時には用具や助成材、さらに資金を前貸して加工させ、その製品を買い取るような企業形態をさす。そのさい、商人の経済力の圧倒的優越と生産者の市場からの遮断などによって、後者を多かれ少なかれ従属的な下請業者にしてしまう場合が、歴史上しばしば見られた」（田中豊治、松田編『西洋経済史』114頁）

・間接制度における生産力の停滞：小生産者の労働は個別的で分散したままであり、資本家も生産過程の内部に立ち入って彼らを直接に指揮し監督することなく、品質や納期等に関する指図を外部から与えるにとどまる→旧来の生産と労働の様式がほとんどそのまま維持される。

(2)第一形態×第二形態：マニファクチュアの歴史的意義

・協業：「同一の生産過程において、または相異なっているが関連のある諸生産過程において、計画的に相並び相協力して労働する多数者の労働」マルクス

・マニファクチュア（分業にもとづく協業）：生産過程がいくつかの部分作業に分割され、各部分作業が特定の労働者ないし労働者グループの専属の作業として割り当てられるようになると、労働の生産力は飛躍的に高められる。

・マニファクチュア（道具を使う手工業技術に立脚した大規模作業場：堀江『入門』86頁）多能工から単能工へ

図）単純協業とマニファクチュア（堀江『入門』86頁）

・マニファクチュアの二つの起源

①すでに社会的分業の諸部門として独立しているいくつかの手工業を結合

②ひとつの手工業をとらえてこれを種々の作業に分解する。

2 堀江英一のマニファクチュア論

(1)堀江の大塚批判

『入門』93頁（マニファクチュア）→68頁（都市の織元と農村の織元）→45頁（自治都市・ギルド）→31頁（村落共同体）、107頁（イギリス革命論）

(2)織元(clothier)の3分類（『入門』92頁）

①「貧乏な織元」独立自営の小業者

②「中産の織元」：「マニファクチュア」

③「富裕な織元」羊毛を生産地から買い入れて①②に糸市を通じた掛けで売る羊毛商人、毛織市場を通じた直接にそれをロンドンに売る毛織物商：マニファクチュア段階の毛織業の頂点

(3)羊毛生産者→織元①②③→毛織物市場の関係はどうなっているか？

3 サフォークにおける農村織物都市の成立と展開

(1) フランダース毛織物工業の衰退

12世紀：イングランド毛織物工業の発展（東南部の都市の毛織物）－羊毛・染料などの原材料

13世紀後半～：フランダース毛織物工業の衰退

①都市内部における商人対職人の対立

②イングランドからの羊毛輸入の不安定化

・英仏関係悪化→イギリスは経済的手段として1269年以後フランダースへの羊毛輸出をし
ばしば停止

③羊毛の価格騰貴：英国王、財政政策として羊毛課税

④市場の狭隘化－イギリス・イタリアの毛織物工業の成長

(2) イギリス農村工業の発展

13世紀末～14世紀はじめ：イギリス毛織物工業の転換点

・東部イングランドの都市毛織物工業の衰退

・西部の渓谷地帯の成長←フリング・ミルの導入による技術革新

設備に多額の固定資本を必要としたが、農村の新興領主(squire, knight)階級は土地収
益・商業利益を投下

新技術（西部の農村の有利）

①水流

・縮緬工程・染色に有利

・水車の利用

②ギルド的制約や課税から自由

③農村の安価な労働力

④羊毛産地への近接

→毛織物工業は都市から農村への中心移動

新工業地帯（西部・東部・北西部）

図) 1470年における毛織物工業の分布図

(3) サフォーク（東部）農村織物都市の成立

図) 15世紀サフォークにおける織物都市の分布

・Bury St Edmunds, Ipswichの特権都市(chartered town)にかかわる毛織物より、それ以
外の農村都市産毛織物の優位

・農村毛織物都市の成長（例：Clare）

1086年調査全戸数128（人口はほぼ600人以上）

図) 14世紀におけるクレアの想像図

三圃式農法

(4)織元の性格

- ・15世紀「織物検査官の会計簿」史料→クレアの主な織元
「問家」織元として自ら織物の製造に従事したというよりか、むしろ独立の織布工の製品を集めてロンドン商人と取り引きしたところの商業活動を主とする商人であったと思われる」(角山『毛織物』43頁)
- ・小織元から大織元へ成長した事例
William Gilbert(1547年遺言状)
・地主・問屋織元：小織元と比べるとはるかに大規模なマニファクチュア経営
"gentleman"と自称
→「ジェントリ」織元の上昇

図) 牧羊業者と織元の関係 (角山『毛織物』69頁)

貧しい織元＝独立の織布工→事実上の産業資本家としての織元
→事実上の賃労働者としての織元

小括

牧羊業者→ 「富裕な織元」 → ロンドン市場
「中産の織元」

この関係はどうなっているのか？→「ジェントリ」(郷紳：爵位(男爵以上)をもたない地主)階層の分析

次回のテーマ

5月14日：第5講 綿工業と機械制大工業

大塚久雄『欧州経済史』2章2

堀江英一『経済史入門』7章1AB10章1A

演習問題「なぜ18世紀後半には綿工業が毛織物工業を急速に追い抜いたのか？」

参考文献

角山栄『イギリス毛織物工業史論』ミネルヴァ書房、1960年。